

# ディスカバー佐倉

第8回

## 和田地域巡り 散策コースの発着点

■ **今回**は、『歴史民俗資料室』を簡単に紹介したいと思います。玄関を入ると右手に事務所があり、声をかけて「資料室」の電気をつけてもらいました。

■ **佐倉**市の最も東部に位置する和田地区は、古くからの農業地域です。和田小学校PTAにより昭和46年に「民俗資料収集委員会」が設けられ、失われつつある民俗資料を収集、平成4年に佐倉市指定文化財指定、同11年に佐倉市に寄贈されました。

■ **和田**ふるさと館歴史民俗資料室は、和田地区民俗資料を中心に和田地区の歴史や暮らしの移り変わりを分かりやすく展示する資料室です。和田地区の歴史環境・自然環境と地域の人材を活用し、生涯学習と地域づくりの拠点となることを目指しています。

■ **資料**室に入ると、和田地区で語り継がれた話(親はうま酒、子は清水)などを、具象した大きなパネルに出会います。



### 1. 和田の歴史

和田地区の歴史上の主な出来事について、代表的な遺跡・史跡と共に解説。

### 2. 伝える人受け継ぐひと

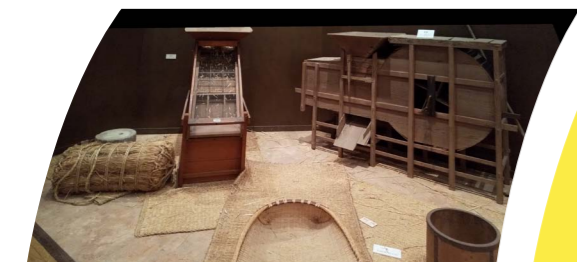
和田地区で語り継がれているお話、遺跡、史跡や伝統を守る人々、昔から続いている年中行事やまつりを紹介。

### 3. かわってきた人々の暮らし

かつて和田地区で使われていた稲作・畑作・養蚕・はたおり・くらしの道具を展示。そして、「和田はたおり保存会」による、はたおり機の保存と技術の伝承を行う「ふるさと伝承室」へとつながっていました。昔の人々のくらしの資料などを拝見し、子供時代を懐かしく思い出しました。のんびりとした秋のひとときを、此処でお楽しみください。

☎ 285-0052 佐倉市八木850番地1 TEL:043-498-4000  
営業時間午前9時～午後5時 休館日(月曜日、祝日、年末年始)

取材担当/広報委員長 岩淵 功



**地域づくりの拠点 和田ふるさと館**  
和田ふるさと館は、出張所、農産加工実習所、高齢者談話室、地域防災集会所、歴史民俗資料室、そしてホールを兼ね備えた複合施設として平成11年12月にオープンしました。太陽光発電設備の設置やトイレの水に雨水を利用するなど、環境に配慮した施設となっています。駐車場として、トイレなどの休憩場所としても活用できます。

# ハローシニア佐倉

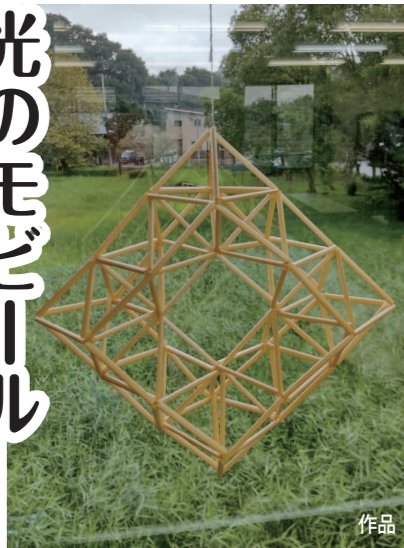
(公社)佐倉市シルバー人材センター



(公社)佐倉市シルバー人材センター ホームページ

## 光のモビール ヒンメリの世界

はじめての女性部会主催企画



不思議な雰囲気を出すフィンランドの伝統的な空間の飾り物『ヒンメリ』を、家の中の演出に取り入れると趣が生まれます。これを作る9月17日の講習会を取材しました。



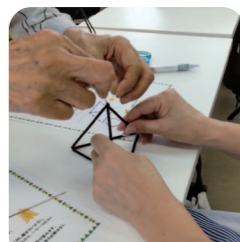
ヒンメリの作り方の説明

### はじめる前に

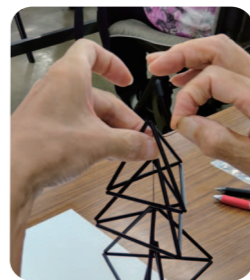
『ヒンメリ』の歴史は古く、ライ麦の収穫祭や北欧で太陽の復活を祝う冬至祭の飾り物に由来するようです。仄かなキャンドルの光に輝く麦藁と、その揺らめく影との不思議な調和から、『光のモビール』とも呼ばれます。

### いよいよ制作

募集定員の10名は埋まり、マスクをつけた参加者は、受付で検温と手指の消毒を済ませてから席に着きました。女性部会の主催ながら男性の参加者もありました。講師の岡崎章子先生による作り方の説明を頭に入れてから、作業が始まりました。材料は乾燥した麦藁の細かいストロー(講習では化成品を使用)と糸。道具はハサミのみ。作り方の基本は、ストローに糸を通して三角形を作り、急所になる三角形の頂点の糸はしっかりと縛り、そこからストローを連ねて立体にすることです。簡単なようですが、正しい手順とコツが分かるまでは、指先の針とストローをジッと眺めては、テキストで確かめます。糸の順番を考え、指先を細かく動かす作業は、脳を刺激します。先生や女性委員の手助けを受けながら1時間ほど経った頃には、大小の三角錐を4つ連ねた、クリスマス風の樫ノ木のヒンメリが出来上がりました。軽く風を起こすと、ほのかに揺らめきます。講習の最後にはくじ引きがあり、先生のヒンメリ作品がプレゼントされました。



分かりにくいところは助けてもらいます



形になってきました



アクセントの玉をつけて完成

**第二部は茶話会**  
作品づくりの後は、参加者と委員との交流茶話会がありました。自己紹介に続く自由なお喋りでは、当人材センターへの希望や就労情報に関する日ごろの思い、仕事での楽しみの発見や会員との交流の経験談、会員を長期継続する秘訣等々、会員の身近な話題に話は膨らみ、和やかな雰囲気の中に終了しました。

**これからのこと**  
女性会員を増やし、会員同士の交流の機会を充実させるのに、特色ある取り組みに工夫を凝らしています。その一例が、女性部会主催の催し物を二ヶ月に一回は企画する計画です。これには、ワークプラザで開催する形式の企画を進展させて、女性部会が各地域に出向く『出前会議』(仮称)のような形式も検討中とのことです。会員の移動時間と距離を縮めて参加し易くするアイデアです。また、組織の正式名称である『女性部会』に愛称をつけるプランも温めているとのことです。

今回の取材を通じて、創意工夫する女性部会の意気込みを感じました。今後の活躍が楽しみです。

取材担当/広報副委員長 徳野 廣一





## 密度の高い広範囲な講習内容

現在植木職として活躍されている会員は約130名。佐倉シルバー人材センターの中で、植木職は最も高収益な職群です。この高収益職群を支えてきたのは、長年に渡って毎年10人前後の植木職を育ててきた植木職養成特別講習の人材育成に依るものです。30期生にあたる今年度の受講生は11名、講師は菊間敏文さんと井澤勝彦さんです。



菊間講師

講習は毎年2月から9月まで7か月間、40日の密度の高い講習スケジュールが組まれています。ワークプラザでの座学もありますが、大半は市内小中学校の敷地やお客様邸での剪定作業実習です。さらに縁石や庭園の知識、垣根作りなど植木に関わる広範囲な知識・技術の習得が組み込まれています。ここ2年間は新型コロナの影響で中止となりましたが、例年9月には六義園と小石川後楽園の庭園見学も行われています。

## お客様邸での剪定作業実習

9月6日のお客様邸での実習当日、センターへの集合時刻の7時には、既に出発準備が整っていました。2台の軽トラックには大型三脚が南京結びでぎっしりと結び付けられ、個数管理された色々な作業用具が積み込まれていました。

積込みの合間に菊間講師に伺いました。「今年度の受講生は皆さんお元気で、全員卒業見込みです。佐倉シルバー人材センターの植木職講習は、教本に基づいて、代々先輩方から継承された幅広い高い技術を習得できる教育プログラムが組まれています。」

朝礼では両講師から本日のお客様の説明と注意事項の連絡があり、最後に安全標語を唱和し、7時20分には3台の軽トラックと乗用車2台が、一斉にセンターを出発しました。

8時にはお客様宅に到着し、受講



軽トラに積まれた大型三脚



朝礼風景



生の皆さんは早速分担された作業に取り掛かっていました。三脚で作業している受講生に対して、講師は三脚転倒防止紐と命綱の装着を確認していました。

菊間講師から本日のお客様について説  
← 三脚転倒防止紐と命綱を装着

# 植木職養成特別講習

本年2月から始まった植木職養成特別講習は9月27日の修了式を前に、仕上げの段階を迎えていました。お客様邸での実習とワークプラザ2階での講習を取材しました。



明頂きました。「10年以上講習に使わせて頂いているお客様です。広いお庭に、植木職の研修に無くてはならない樹種が所狭しと生えています。色々な技術を身に付けるのに格好のお庭で、大変有難く思っています。」



井澤講師と越智さん



生垣刈込作業の染谷さん

作業の合間に受講生にもお聞きしました。染谷輝さん、「講習では木の種類に応じた剪定の仕方、木の形の作り方、工具の使い方などをきっちり教えて頂きました。10月からは新たに先輩の方々と一緒に仕事を行うことになる点でちょっと不安なところはあります。」

唯一の女性受講生の越智玲子さんからは、「昔から植木に興味がありました。高いところに登ることは怖くないですが、重いものを持つ時などは男性との違いを感じます。でも皆さん気さくな方々で、楽しくやっています。」お客様邸の広いお庭での剪定作業は更にもう1日、合わせて2日で終了しました。

## 仕上げの座学講習

9月13日には、9回の座学講習の最終回がワークプラザの2階で行われました。講師の羽部常務理事からはセンターの定款、就業規約など規程類の解説、事故防止に関する留意事項、講習終了後1年間の見習い期間中の就業状況などについて説明がありました。質疑応答では、受注状況の現状と今後の見通しや、トラックなどの設備購入などについて、熱心な突っ込んだ質問が多数出されました。最後に菊間講師から植木職についての名言集の解説があり、午前中の講習が終了しました。

受講生の皆さん、7か月の講習お疲れ様でした。これからは植木職の親方として、お元気で活躍下さい。



座学講習風景

スマホでもご覧下さい



動画

取材担当/広報委員 小野寺 弘孝

# 人趣味と



石膏ボードの作品と小林さん

書道を一つの分野で、「毎日書道展」では刻字が独立したテーマ分野になっており、また日本刻字協会という全国組織もあり、毎年「日本刻字展」が開催されています。刻字愛好会の多くの会員が作品を出品しているそうです。

「刻字」の魅力が長く生き残ります。

「刻字」と係る動機となったものは、中学生の頃から木の版画で年賀状を作ったり、文字や絵を彫ることに興味があったことです。東京に勤務していた40代前半、千葉県主催「高校解放講座」の「刻字講座」を受講。約4か月で無事に講座を修了すると、受講した仲間で1991年に「佐倉刻字愛好会」を立ち上げました。佐倉中央公民館を会場に月2回の土曜日に、講座の講師であった先生を指導者に迎え、学習を継続する中、当初からの愛好会メンバーは自分一人となり、会長として20名程の会員と制作活動をしています。

「刻字」を簡略的に表現すると「書を板に彫る」となります。具体的に説明すると、墨と筆で揮毫した書を原稿にして、それを板にノミ、彫刻刀などで凸に彫った文字(陽刻)に金箔を貼ったり、着色するなどの彩色を施して仕上げたものです。



↑ 陽刻(左)と凹に彫る陰刻(右)の作品

書道の一つの分野で、「毎日書道展」では刻字が独立したテーマ分野になっており、また日本刻字協会という全国組織もあり、毎年「日本刻字展」が開催されています。刻字愛好会の多くの会員が作品を出品しているそうです。

文字を凸に彫る本ノミ作業

「刻字」の魅力を簡単に言い表すと、白黒の世界である「書」が、板に彫り入れ、彩色することで、カラフルな美術工芸品に生まれ変わり、刻字を通して新たな書の世界が広がるとも言えます。そして多くの作品が長く生き残ります。

実用的には、神社・仏閣の銘板や扁額、商店などの看板、住宅の表札などがあります。佐倉城址公園内にある3ヶ所の屋根付き立て看板「佐倉城址公園」は、刻字愛好会の会員有志が20年以上前に制作し、彩色は2回修復したものです。



刻字愛好会の制作した立て看板

現在も佐倉中央公民館の会場(3階「アトリエ」)で、毎月第2、第4の土曜日午後1時から4時まで板に彫るなど学習をして、完成した作品の発表は、毎年白井公民館



↑ 31年前の処女作「望」と最新作「吉」

で展示会を開催し、今年は規模を縮小して第29回展を開催しました。初心者や興味のある方のために、毎年7月に「体験講習会」を開催5回の講習で1作品を完成しています。今年も8名が受講しました。もちろん中央公民館での学習時間内なら、いつでも自由に見学できます。80歳まで現役で続けたいと言う小林さんが、懇切丁寧に説明してくれますので、ぜひ「刻字」という美術工芸品を見に来て下さいと語ってくれました。

取材担当/広報委員 長谷川 幸雄